



Data 2025-24

監督・共同脚本：ブラディ・コーベ
ット

共同脚本・セカンドユニット監督：
モナ・ファストヴォールド

出演：エイドリアン・プロディ/フ
ェリシティ・ジョーンズ/ガ
イ・ピアース/ジョー・アル
ウィン/ラフィー・キャシデ
イ/ステイシー・マーティン
/アレッサンドロ・ニヴォラ

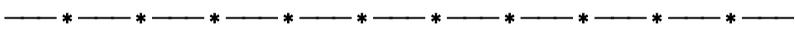
みどころ

タイトルだけでは何の映画かサッパリわからないが、「ブルータリズム」は建築様式の一つだ。アカデミー賞 10 部門にノミネートされた本作は、ホロコーストを生き延び、アメリカに渡ったある建築家の光と影の半生を描いたもの。主演のエイドリアン・プロディは『戦場のピアニスト』(02年)、『シネマ2』64頁)に続いて、見事2度目のアカデミー主演男優賞をゲット！

芸術家はパトロンとの相性が大切だが、敬虔なカトリック教徒たる大実業家から、丘の上に立つ巨大な礼拝堂付きのコミュニティセンターの設計・建築を依頼された主人公はユダヤ教徒だから心配。そう思っていると案の定！

今ドキ珍しくインターミッションを挟んだ215分の巨編は、壮大な歴史上の物語兼天才建築家の偉人伝！てっきりそう思ったが、実は・・・？

大谷翔平は現在ロサンゼルスでアメリカンドリームを体現中だが、さて本作の主人公のそれは・・・？



■賞 10部門にノミネート！この215分の大作は必見！■

毎月1～2月になるとアカデミー賞のノミネート合戦が始まるが、本年度第97回アカデミー賞で作品賞、監督賞、主演男優賞等、計10部門にノミネートされ、「本年度アカデミー賞大本命！」とされているのが本作だ。同作は第82回ゴールデングローブ賞3部門や、第81回ヴェネチア国際映画祭銀獅子賞等も受賞しているから、それはごもつともだが、原題の『THE BRUTALIST』、邦題の『ブルータリスト』だけでは、何の映画かサッパリわからない。そこでチラシを読むと、「ホロコーストを生き延び、アメリカへ渡ったある建築家 その光と影の半生30年を肌で感じる、圧倒的迫体験がここにある」と謳われているから、なるほど、なるほど・・・。本作で主演男優賞にノミネートされたのは、『戦場のピ

ピアニスト』(02年)、『シネマ2』64頁)で、実在するホロコーストの生存者であるウワディスワフ・シュピルマンを演じてアカデミー主演男優賞を受賞したエイドリアン・ブロディだから、本作もピアニストから建築家に職業を変えたホロコースト映画!?

一瞬そう理解したが、本作でエイドリアン・ブロディが演ずる主人公の名前はラースロー・トートだから、やっぱり『ブルータリスト』というタイトルの意味はわからない。そこで改めて調べてみると、パンフレットには、「ブルータリズムと呼ばれる建築様式は、戦後の復興計画の中で、1950年代からイギリスで見られるようになってきていた。その外観はミニマリスト的で、コンクリートやレンガが剥き出しになっている。ブルータリズムは装飾よりも、構造そのものを見せる手法だ。」と書かれている。また、新聞の記事では、『ブルータリズム』という建築様式がある。コンクリートなどの素材を大胆に生かし、装飾を排した手法で、その建築はごつごつとした材質が荒々しく迫ってくるような印象を与える。第2次世界大戦後の復興の中、欧州を中心に広まった。」とある。また、「ブルータル」とは「粗野な」、「乱暴な」という意味らしい。なるほど、なるほど。

すると『ブルータリスト』と題された本作は、ホロコーストを生き延びてアメリカに渡った実在のハンガリー系ユダヤ人の建築家ラースロー・トートが、自己の建築様式である「ブルータリスト」をアメリカに持ち込み大成功を収めた、という成功物語! ? 結局そう理解したが、実はそれも完全な間違いだった!

■歴史を描いた作品だが、主人公は架空の人物! ■

本作の監督と共同脚本はブラディ・コーベット、そして共同脚本とセカンドユニット監督がモナ・ファストヴオールドだ。本作が3作目の監督作品となるブラディ・コーベットは、第1作『シークレット・オブ・モンスター』(15年)も、第2作『ポップスター』(18年)も有名だそうだが、寡聞にして私は全く知らなかった。したがってモナ・ファストヴオールドについても、私は全く知らなかった。

他方、本作のパンフレットにある「PRODUCTION NOTES」では、『ブルータリスト』の成り立ちについて、①ラースロー・トートの誕生、②キャストについて、③建築とプロダクションデザイン、④ヨーロッパでのフィルム撮影、⑤音楽について、⑥“過去の存在”に分けて解説しているので、これは必読! それを熟読して驚いたのは、「ラースロー・トートの誕生」の項で、「ラースロー・トートはブラディ・コーベットとモナ・ファストヴオールドが生み出した架空の人物である」と書かれていたこと、つまり、本作の主人公ラースロー・トートは『戦場のピアニスト』の主人公ウワディスワフ・シュピルマンのように歴史上実在した人物ではなく、あくまでブラディ・コーベット監督が作り出した架空の人物だということだ。

ちなみに、私は本作を鑑賞した日に劇場への入口で、配布された『建築家ラースロー・トートの創造』マーガレット・ヴァン・ビューレン コミュニティセンター」と題するリーフレットを受領した。そこには、本作のメインストーリーとなる、ラースロー・トート

が設計・建築したペンシルベニア州ドイルスタウンにある、「丘の上のランドマーク」たるマーガレット・ヴァン・ビューレンコミュニティセンターについての詳しい解説がされていた。これを見れば、誰でもこの建築物は実在のもので、実在の人物ラスロー・トートが設計・建築したものと考えてしまうが、実はそうではないということだ。何と、何と！この点については、3月2日付読売新聞「広角多角」欄の中で、編集委員の伊藤俊行氏が、『長期の大連立 安定と副作用』に次のとおり書いているので、これも必読！

・・・入口で冊子を渡された。

建築家の来歴が記され、映画に登場する建築の図表入り解説もある。てっきり実話に基づく映画だと信じそうになった。上映後、冊子をよく見ると、片隅に老眼では見えにくい小さな字で「本書の内容は一部を除きすべて架空」とある。

確かに、建築家のプロフィール写真は主人公を演じた俳優その人だ。日頃、手の込んだ偽情報や誤情報を使った誘導工作には気をつけようとして書いてきた身としては、「してやられた」と苦笑するしかなかった。

■自由の女神の歓迎は？彼の能力の米国社会での評価は？■

ウクライナ戦争の停戦をめぐるトランプ大統領の動静に注目が集まる中、去る2月28日の大統領執務室におけるトランプ大統領及びバンス副大統領とゼレンスキー大統領との“激しい口論”は前代未聞の風景になった。アメリカを象徴する言葉は自由。そして、そんなアメリカを象徴するものが、「自由の女神」だ。

ハリウッド映画には、自由の女神が自由な国アメリカを象徴するものとしてよく登場するが、それは本作冒頭でも同じ。しかし、ラスロー・トートの妻エルジェーベト・トート（フェリシティ・ジョーンズ）の重々しいモノローグの中で映し出される自由の女神は、逆さまになったり、横倒しになったりしているから、アレレ、アレレ。こりゃ一体ナニ？

他方、第2次世界大戦のホロコーストを生き延び、1947年、妻のエルジェーベトと姪のジョーフィア（ラフィー・キャシディ）をヨーロッパに残したまま、単身新天地のアメリカに到着したラスロー・トートはペンシルベニアに住む従兄弟のアティラ（アレッサンドロ・ニヴォラ）と再会し、アティラの家具店に住み込みで働くことに。そこでの最初の仕事は、アティラの顧客ハリー（ジョー・アルウィン）の父親ハリソン・ヴァン・ビューレン（ガイ・ピアース）が住んでいる屋敷の図書室の大改修だ。そこで見せた彼の建築家としての能力に対するアメリカの評価は？

父親へのプレゼントとして、父親が留守の間に図書室の大改修をしたいとの申し出は、アティラにとって大商談なら、ラスローにとって初の大仕事だから、当然ウェルカム。父親に内緒でそれを行い、サプライズとしてプレゼントしたいとの申し入れも、もちろんノープロBLEMだ。本作前半では、この図書室改修工事で見せるラスローの「ブルータリズム」に注目！日本では安藤忠雄の「住吉の長屋」や「光の教会」が有名だが、なるほど“建築の思想”とはそういうもの。ところが、何と改修工事が完成に近づいたある日、

突然、図書室やお屋敷の所有者である大実業家のハリソンが、「お前たちがなぜ私の屋敷に入っているのだ！なぜ私の図書室を壊しているのだ！」と怒鳴りながら入ってきたから、ビックリ！そんなことを言われても……。弁護士の私の目から見ても「父子の問題は父子の間で解決すべき」が当然で、アティラとラースローの側には問題はないはずだが……。

■□■真の建築家に真のパトロンが！そう思いきや……。？■□■

近代国家・現代国家では、真の芸術家に対する国家的支援の必要性が認識されているが、意外にも、第二次世界大戦直後の“自由の国”アメリカは未だそうではなく、個々のパトロンによる個々の芸術家への支援にとどまっていたらしい。また、近世が始まる前の中世では、イタリアのルネッサンス全盛時代は例外として、モーツァルトの生涯を描いた名作『アマデウス』（84年）をみれば、真の芸術家とパトロンとの微妙な関係がよくわかる。

本作導入部では、図書室の大改修工事という初仕事が入ってしまった、失意の中で肉体労働に従事しているラースローの前に、ハリリーの父親の大実業家ハリソンが“真のパトロン”として登場するので、それに注目！ラースローのヨーロッパにおける輝かしい実績を知ったハリソンが、まず、図書室の大改修工事についての“非礼”を謝罪する姿には好感が持てる。また、ラースローを家族全体でもてなすとともに、ラースローがヨーロッパに残っている妻や姪がアメリカ入国を希望していることを聞いたハリソンが、親しい議員を紹介する等して、積極的にそれに協力する姿も素晴らしい。そして、最も重大なことは、ラースローに大きなプロジェクトを打診することだ。それは丘の上に、大きな礼拝堂が併設された住民が集まるコミュニティセンターを設計し建築するという大プロジェクトだから、規模も費用もすごいものだ。

■□■15分のIntermission！この体験は久しぶり！後半は？■□■

今なお「世界一の名作」と称えられている映画が『風と共に去りぬ』（39年）だ。大学生の時に初めて同作を観た時の興奮を、私は今でもよく覚えている。そのため、その後、劇場でリバイバル上映される時はもちろん、TVで放映される時も毎回観ている。したがって、今はレコーダーに完全録音されているから、ルームランナーで運動しながら、30分、1時間刻みで観ることも……。名作映画には忘れられない映画音楽がつきものだが、同作を見るたびに毎回感心するのがその映画音楽ともに、222分の長尺となった同作のIntermissionに入るタイミングの良さだ。

同作のヒロイン、スカーレット・オハラを演じる女優はビビアン・リー。冒頭にもみるヒロインは、求婚してくる南部の男たちにもはやされながらも、それに満足できない魔性的な魅力を持った力強い南部の女だ。そんな彼女が、南北戦争で家屋敷をすべて奪われ、女手1つで家族を養っていかねばならなくなった時、自分でも気づかなかった底力に気づき、「私はタラと共に生きていく。絶対に家族を飢えさせることはしない。」と、タラの大地に立ち、力強く拳を振り上げて神に誓うシーンが、名曲「タラのテーマ」の流れる中で入るIntermissionは最高だった。1960年代の名作・大作には、例えば『ドクトルジ

バゴ』(65年)等々でも **Intermission** がついており、そこでは名作映画に不可欠の名作音楽が流れていたが、さて、本作の **Intermission** は？それは当然、ラースローがハリソンからの大プロジェクトを応諾する希望に満ちたシークエンスだが、さて 15 分の **Intermission** を終えた後半の展開は？

■□■建築家 VS 注文主の確執は？妻との確執は？■□■

ハリソンからラースローに対する大プロジェクトの注文は、いわば、「住吉の長屋」等で一躍世間の注目を集めた安藤忠雄（の建築設計事務所）に、一躍さまざまな世界的プロジェクトの注文が舞い込んできたのと同じようなものだ。もっとも、安藤忠雄の場合は、近代法に基づくきちんとした契約に基づくものだったが、ハリソンのラースローへの注文は口約束だけ。すると、2 人の関係が良好な間はノープロブレムだが、敬虔なカトリック信者であるハリソンからの礼拝堂建築の依頼を、ユダヤ教徒であるラースローがすんなり受け入れ、ハリソンの意向に沿って「丘の上に立つ壮大な礼拝堂」を建築することができるの？私には、当初からそんな不安があったが、ストーリーが進むにつれて次第にそれが顕在化していくので、本作後半からそれに注目！

お金持ちほどケチ。それが私の持論だが、それはトランプ大統領をみても、本作のハリソンをみても十分納得できる。トランプ大統領は現在、ウクライナ和平に伴うアメリカの利権と、関税によるアメリカの富国化をモロに狙っているが、母親の死亡を契機とし、敬虔なカトリック信者として、礼拝堂を含むコミュニティセンターの建設を決断したハリソンの思惑は？その野望は？他方、それを知りつつ、全体のイメージにおいても、総予算においても、ハリソンの気に入るプランを提供しなければならない、ユダヤ教徒であるラースローの苦悩は？さらにそんなラースローの苦悩を知りつつ、何とかそれを支えようとしている妻エルジュベットの忍耐と努力は？そして、それはいつまで続くの？

映画『アマデウス』(84年)では、天才モーツァルトが才能のままに作曲を進めていた若き日と少しずつ決別し、夢の中にしばしば登場してくる悪魔(?)と苦闘する姿が描かれていたが、ラースローの苦悩は如何に？そんな苦悩の中で、本当にコミュニティセンターは完成の日を迎えることができるの？本作後半は、そんなジリジリした展開をしっかりと鑑賞したい。

■□■米国のユダヤ支援の本気度は？建築家の米国への思いは■□■

中東のガザ地区を焦点として長い間続いているイスラエル VS パレスチナ紛争を見ると、アメリカのイスラエル(ユダヤ)への支援が、いかに根強いものであるかがよくわかる。これは間違いなく、米国社会にしっかり根付いている優秀なユダヤ人人脈に基づくものだから、表面上はいかにも堅固に見える「日米同盟」よりはるかに根強いものだ。

「序曲」に始まる本作は、「第 1 部 到着の謎 1947-1952」、「第 2 部 美の核芯 1953-1960」を経て、「エピローグ 第 1 回建築ビエンナーレ 1980」で終わるが、天才建築家のラースローが、自由の国アメリカで悪戦苦闘を続ける中、1947年の国連総会で、ユ

ダヤ人国家の樹立を求める決議が採択されたことや、1950年に米軍と国連軍が朝鮮半島で大きく前進したことなど、随所に歴史的な出来事が記録映像とともに映し出されるので、その対比に注目！しかし、アメリカは本気でイスラエルの建国とその後のイスラエルの繁栄に支援をしたの？アメリカのイスラエル支援の姿は、以前のバイデン政権をみても、現在のトランプ政権をみても明白だが、自由の国アメリカに移住し、ハリソンから大プロジェクトの設計と建築を依頼され、その完成に奔走するユダヤ人建築家ラースローへのハリソンの支援は、“真のパトロン”に値するものなの？本作後半はそれが最大のテーマになっていくので、それにも注目！

しかして、本作後半には、アルコールとドラッグに触まれたラースローが、「米国の人々は我々を望んでいない。我々がイヤなんだ！我々は“無”だ。無にも満たない。」と吐き捨てるシークエンスや、エルジェーベトが、一家揃って食事をしているハリソンの面前に乱入し、“強姦魔”と罵るシークエンスを見ていると、アレレ、アレレ……。ここまで建築家と注文主との関係はこじれてしまっていたの？これでは礼拝堂を含むコミュニティセンターの完成など到底ムリ！そう思わざるを得なかったが……。

■□■エピローグに見る、ブルータリズム建築家の完成品は？■□■

1980年にヴェネチアで開催されたビエンナーレにおける第1回国際建築展は“過去の存在”というタイトルが付けられたそうだが、それは一体なぜ？「序曲」から「第1部」、「第2部」と続いた本作では、ラースローの悪戦苦闘ぶりが描かれ、大実業家ハリソンのわがまま(?)の前に、結局ラースローの夢が破綻していくストーリーが描かれる。つまり、ユダヤ人の天才建築家ラースローは、プロ野球界の野茂英雄やイチロー、そして大谷翔平らが実現したアメリカンドリームの実現は叶わなかったわけだ。私は「第2部」が完了した時点でそう思ったが、「エピローグ」に登場し、第1回ビエンナーレの開催地でラースローが完成させた礼拝堂を含むコミュニケーションセンターを多くの観客に紹介している女性は何者？

アルコールとドラッグのためにあれほどボロボロになってしまっていたラースローは本当にこの建築物を完成させることができたの？私にはその詳細はわからないが、完成した礼拝堂の天井高はめちゃ高いもの。また、その天井から入ってくる太陽光は素晴らしいものだ。その他、入場時に配布されたチラシを詳しく読み込むと、ラースローが完成させたこの完成品の素晴らしさがよくわかる。私は安藤忠雄が設計・建築した「光の教会」が大好きだが、ラースローが完成させたこの礼拝堂付きコミュニティセンターはその数十倍の規模のものだから、見応えがある。ラースローの人生は妻エルジェーベトの人生を含めて苦難に満ちたものになってしまったが、“ブルータリストの建築家”ラースローが完成させたこの礼拝堂を含むコミュニティセンターは永遠の命を持つものだから、その素晴らしさをじっくりと味わいたい。

2025（令和7）年3月6日記